

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520477

研究課題名（和文） 学習へのプラスの波及効果を生む実用的スピーキングテストの研究・開発

研究課題名（英文） Research and development of a practical speaking test with positive effect on learning

研究代表者

平井 明代 (HIRAI AKIYO)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：00312786

研究成果の概要（和文）：

4年間の研究において、ストーリー・リテリングタスクを用いた、中高大のクラスで一斉に実施することができるスピーキングテスト（ストーリー・リテリング・スピーキングテスト：SRST と呼ぶ）を開発した。クラスで実施しやすく、受容能力・発信能力にプラスの影響を与えることができる。SRST の特徴としては、妥当性があるだけでなく、市販のスピーキングテストでは測定しにくい初級者用の発話も測定することができることである。この点からも中-highのクラス用に適するテストが開発できたと言えよう。スピーキング・パフォーマンスの採点には EBB (Empirically derived, Binary-choice, Boundary-definition scales) と呼ばれる評価形式を採用し、教員が生徒のパフォーマンスを一度聞く間に採点できる高い信頼性のある評価尺度を完成させた。

研究成果の概要（英文）：

In this four-year project, a semi-direct speaking test using a story-retelling task, named Story Retelling Speaking Test (SRST), has been developed for junior and senior high school and university students. The SRST was designed to ease the process of test preparation and administration and generate positive washback effects on enhancing learners' receptive and productive abilities. Concerning scoring learners' speech performance, an empirical scale called an EBB (Empirically derived, Binary-choice, Boundary-definition) scale has been developed for the SRST. Through continuous modifications of the scale, the scale has been made that enables teachers to rate the student's speaking performance while listening to it once with sufficient reliability.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：英語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：スピーキング、テスト、EBB、ストーリー・リテリング

1. 研究開始当初の背景

近年、国際社会において英語でコミュニケーションができる人材が求められている。しかし、現状では、時間の要するスピーキング指導とその評価が十分に行われておらず、日本人の英語コミュニケーション能力の実質的向上が十分見込めない。この状況を踏まえ、中高大のクラスで活用しやすいスピーキングテストとその評価方法を確立する必要性が見出された。

2. 研究の目的

本研究は、中高大のクラスで簡単に使用できる実用性のあるスピーキングテストの研究・開発を目的とする。テスト形式は、発信能力だけでなく受容能力への指導・学習にプラスの波及効果をもたらすことができるように、読んだ内容を話す方式のスピーキングテスト (Story Retelling Speaking Test: SRST と呼ぶ) とした。もう一つの目標は、SRST のパフォーマンスを測定するために、妥当性、信頼性および実用性の高い評価尺度を開発することである。最終目標として、さまざまな熟達度レベルのテストを作成し、評価尺度とともに、クラスで使用してもらえるように普及させることをめざす。

3. 研究の方法

(1) まず、初級レベルのスピーキングテストの開発に向けて、ストーリー・リテリング用のリーディングテキストの最適な長さを決定するために、150語の長めのテキストと100語の短めのテキスト2つずつをSRST形式にした。そして、約60名の学生に実施し、彼らの発話をテープに録音した。

(2) テスト終了後にアンケートを配布し、テストの妥当性、波及効果、および発話の産出量に影響する要因などを調べた。

(3) 次に、スピーキング・パフォーマンスの採点用には、発話を聞きながら、質問に「はい」、「いいえ」で順に答えていくうちに採点ができる EBB (Empirically derived, Binary-choice, Boundary-definition scales) と呼ばれるユニークな評価形式を採用し、SRST用に評価尺度を開発した。十分に高い実用性および信頼性が確保されるかを、従来の分析的評価尺度と比較するために、同じ受験者のスピーチをこの2つの方法で採点した。評価者には、どちらの評価

尺度を使用した方が採点しやすかったかアンケートを取った。

(4) 作成した EBB 評価尺度は、従来の分析的尺度より、高い信頼性を示したが、それを使って採点するには時間がかかる結果となったため、EBB 尺度の見直しを行った。その改良版と異なった形式の評価尺度を使って、再度採点を行い、妥当性・信頼性・実用性が高まったかを検討した。

(5) 最後に、SRST の併存的妥当性を調べるために、妥当性が既に検証されている Versant と Standard Speaking Test (SST) を、SRST を受けた学生に受験してもらい、その得点の相関関係や分布の特徴を調べた。また、3つのテストを受験した上で、受験生にそれぞれのテストの妥当性および波及効果にかかわるアンケートを実施した。

4. 研究成果

上記の研究から、次のような成果を得た。

(1) SRST の流れとして、まず、提示されたストーリーを黙読し、内容把握問題に各自口頭で答える。次に、試験用紙を裏返し、ストーリーについて、キーワードを見ながら2分半話す。発話の最後には、ストーリーに関する感想や意見などを付け加えるという手順を取った。このようにテストをデザインすることで、教室利用において次のような利点があるテストとなった。第1に、話す言語材料 (ストーリー) を与えることによって、発話する言語知識を十分に持っていない学習者にとっても、学習効果があり、かつ発話を促すことができる。第2に、ストーリーに使用するテキストの難易度を変えることによって、SRST のレベルを変えることができる。第3に、ストーリーに使用するテキストは、文法項目や重要語句などのターゲットになる学習項目を含めることができ、学習の定着が図れる。

(2) さらに、実用性を高めるために、使用するストーリーが変わっても、共通して使用できるような手順と音声指示文を完成させた。

(3) 初級レベルの SRST に関しては、受験者の発話再生量から、2分間の黙読後、記憶の負担なくストーリーに関して話ができるテキストの長さは、100語から150語程度の長さが妥当である。しかし、内容の親しみや

すさに発話量が影響されるため、2種類以上のテキストを使用する方が信頼できる評価ができる。

(4) 発話量は、主にストーリーのトピックや長さに影響されやすいことから、複数のテキストを使用するほうがより正確なスピーキング能力が測れる。

(5) テストの有効性 (usefulness) について、アンケートの分析を行った結果、受験者は、ストーリー・リテリング・スピーキングテストが、主には意見を含めてリテリングするというスピーキング能力を測定されていると知覚しており、学習上、役立つテストであると回答していた。このことから、受験者側から見たテストの妥当性および発信能力を鍛える上でプラスの波及効果に関する1つの証拠を収集することができた。授業での活用にたいへん役立つテストになるのではないかと思われる。

(6) SRST の実施状況から、面接式スピーキングテストと比較して、録音機器を利用できるところであれば、たいへん簡単に実施することができ、実用性の高さが確認された。

(7) 信頼性に関しては、その評価方法として、得点を出しやすい EBB 方式を作成し、何度か改良を重ね、2分半の生徒の発話を1度聞く間に、「伝達能力 (communicative efficiency)」「文法と語彙 (grammar & vocabulary)」「発音 (pronunciation)」の3つの観点で高い信頼性のある評価を行うことができる評価尺度を完成させた。また、2つの異なったストーリーを実施することで、十分信頼性のある評価を行うことも確認した。

(8) 評価尺度の実用性の面では従来の分析的評価尺度の方が若干優れていたが、改良版では、実用性、信頼性とも他の評価尺度や評価形式と比較しても、ほぼ同じ程度かより優れている面が多く、実用面においても問題なく使用できるようになっていた。しかし、生徒どうしが評価し合うピア評価として使用するには難しい面もあり、今後、さらに使いやすい評価尺度を検討していく必要があることがわかった。

(9) SRST の併存的妥当性に関しては、市販のスピーキングテストである Versant および SST の3つのテストの相関分析および重回帰分析の結果、SRST は Versant および SST と中程度の相関があり、46%の SRST の得点の分散が2つのテストで説明できることが示され、ある程度の SRST の妥当性が証明された。

(10) SRST と市販の2つのテストの得点間にずれが大きい受験者の発話を調べたところ、タスクの違いと、評価時の強調する側面の違いがあった。SRST に特化した特徴として、市販のスピーキングテストではカバーできない初級者用の発話も測定することができることがわかった。このことにより、初級レベルの多い中学・高等学校の授業で使用できるテストとなっていた。

以上10点が明らかになり、今後は、中級・上級レベルの SRST の開発を行うとともに、初級レベルに関しては、SRST の練習問題やテスト冊子を作成し、SRST 普及に努めていく必要がある。また、上記(8)に触れたように、ピア評価用に、今後さらに使いやすい評価尺度を検討していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① Koizumi, R., & Hirai, A. (2010). Exploring the quality of the Story Retelling Speaking Test: Roles of story length, comprehension questions, keywords, and opinions. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 21, 211-220. (査読あり)

② Hirai, A., & Koizumi, R. (2009). Development of a practical speaking test with a positive impact on learning using a story retelling technique. *Language Assessment Quarterly* 6, 151-167. (査読あり)

③ 小泉利恵 (2009). 常磐大学国際学部の学生の英語スピーキングの特徴: 日本人英語上級者と英語母語話者との比較から『常磐国際紀要』13 53-70. (査読あり)

④ Hirai, A., & Koizumi, R. (2008). Validation of an EBB scale: A case of the Story Retelling Speaking Test. *Japan Language Testing Association (JLTA) Journal*, 11, 1-20. (査読あり)

⑤ 小泉利恵 (2007). より適切なテスト得点の解釈と使用を目指して: 妥当性と妥当性検証法『大学英語教育学会関東支部 2007 年度研究年報』4, 38-41. (査読なし)

[学会発表] (計5件)

① Koizumi, R., & Hirai, A. (2011.6.23).
Comparing the story retelling speaking test
with other types of speaking tests
*The 30th Annual Language Testing Research
Colloquium*. Michigan University, 米国.

② 平井明代 (2009.8.6). 「TEASY (ティー
ジー) 項目バンクによるテスト問題 ; 教材の有
効利用法」 第 49 回外国語教育メディア学会
全国研究大会, 流通科学大学.

③ Hirai, A., & Koizumi, R. (2008.8.10).
Developing the Story Retelling Speaking Test
for classroom use. *The 34th JASELE* (第 34 回
全国英語教育学会), 昭和女子大学.

④ Hirai, A., & Koizumi, R. (2008.6.28). What
does the story retelling speaking test measure?
Comparison with other types of speaking tests.
*The 30th Annual Language Testing Research
Colloquium*. Zhejiang University, 中国.

⑤ 小泉利恵 (2007.9.6). 「スピーキング・テス
トにおける語彙的複雑さの指標とその特徴」
大学英語教育学会全国大会. 安田女子大学.

[図書] (計2件)

① Hirai, A. (2010). *L2 listening and reading
fluency: A comparative study of English with
diverse L1 backgrounds*. Berlin: Lambert
Academic Publishing, pp. i~viii, 1~144, 単.

② 平井明代 (2008). 『TEASY : テスト問題管
理・作成補助ソフト概要 Ver.3.0』(有) 公共
システム研究所 : 全 83 頁, 単.

[その他]

ホームページ等

<http://www.modernlc.tsukuba.ac.jp/~hirai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平井 明代 (HIRAI AKIYO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准
教授
研究者番号 : 00312786

(2) 研究分担者

小泉 利恵 (KOIZUMI RIE)
常磐大学・国際学部・専任講師
研究者番号 : 70433571